

最終成果報告書

報告者氏名: 高橋順治

所属: 生駒市立生駒小学校

記録日: 平成 27 年 2 月 24 日

【対象児の情報】

○学年 3年生の男児 A

○障害と困難の内容

- ・医療機関にはかかっているが、校内委員会では、読み書き障がい(ディスレクシア)と注意欠如多動性障がい(ADHD)の疑いありと判断している。
- ・WISC-IV では、知的には平均に位置するが、読み書きは正確性と流暢性のところに課題を抱えている。
- ・集中力が続かず、刺激に反応しやすい。通級指導では、集中して課題に取り組むことが出来るが、通常学級においては、友だちの活動や持物が気になったり、廊下やベランダから聞こえる音が気になったりすることが多い。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・「読み」や「書き」に対して苦手意識を持ちながらも、iPad を使うことによって、宿題や課題について意欲的に取り組む事が出来る。

○実施期間

通級指導の時間: 平成 26 年 5 月 13 日から平成 27 年 2 月 7 日

○実施者

高橋順治

○実施者と対象児の関係

通級指導教室の担当教員

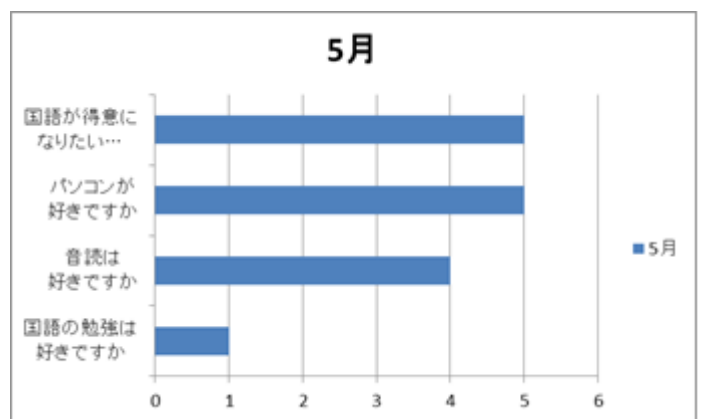
【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・対象児に自己評価シート(東京都教職員研修センター 小学校第1学年～第3学年用)を書いてもらったところ、項目7の「あなたは、自分がダメな人間だと思うことがありますか」という問いに対して、4件法で「よくある」と答えていたり、「あなたは今の自分が嫌いですか」という問いに「とてもそう思う」と答えたりする等、自尊心の低さがうかがえた。

- ・通級指導開始時に、国語に対するアンケートをとったところ、以下のような結果になった。ここで、筆者は、A児が音読に対して意欲をなくしているのに、どうして「音読が好きなのか」で4点をつけたのか確かめたところ、「今はきらいだけれど、本当は勉強して好きになりたい」ということだった。

また、「国語の勉強は好きですか」という問いに対して1点だった理由は「音読や漢字テストがあるから」ということだった。



- ・対象児の読み書きの状態を客観的に知るために「小学生の読み書き能力評価」(URAWSS)を指導開始時にとったところ、以下のような結果が出た。

▼有意義文の書き課題: 書いた文字数が 47 文字、1 分間の書字速度 15 文字で評価A

▼無意味文の書き課題: 書いた文字数が 55 文字、1 分間の書字速度 18 文字で評価A

▼読み課題: 読んだ文字数 19 文字、1 分間の読み速度 114 文字で評価C

▼内容理解: 6 問中、3 問正解

結果から、対象児は「見て書く速度は平均的、読む速度が遅い(聴覚音韻型)」の読み書きの困難さを有すると解釈された。

○活動の具体的内容

①読みと内容理解の課題に対して支援を行うために

・「読み」の困難さを補償して、困難さを軽減し、自尊心を回復するために iPad で「Voice Of Daisy」を使用した。

②書きの課題に対して支援を行うために

・「書き」の困難さを補償して、困難さを軽減し、自尊心を回復するために iPad で「漢字忍者」や「漢字二年生」などを使用した。

・考えをまとめて、作文への抵抗を軽減するために iPad で「Simple Mind+」を使用した。



○対象児の事後の変化

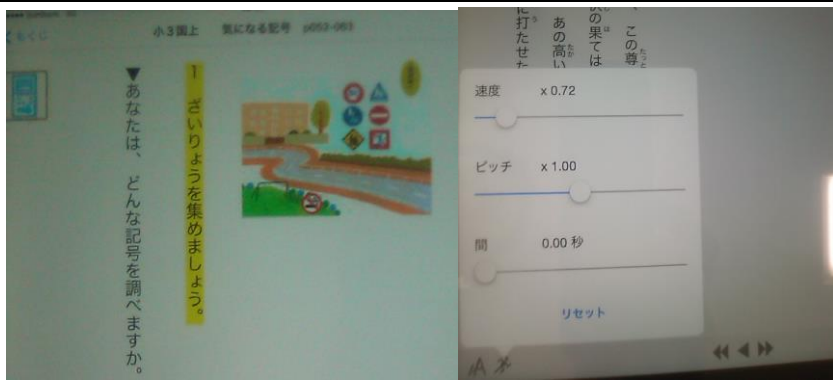
①を通じて

・「読み」の困難さを補償して、困難さを軽減し、自尊心を回復するために、3 年生の国語の教科書教材をダウンロードして iPad で「Voice Of Daisy」を使った。家では、ほとんど音読の宿題をしていないということだったが、「Voice Of Daisy」を使わせた。

・はじめに、読み上げ速度を「標準」で聞かせたところ、「何を言っているのかよく分からへん」と言った。そこで、対象児に操作の仕方を教えて「スピードを変えることができるよ」と言ったところ、「遅くできるの?」と聞いてきたので、「やってごらん」と言って速度を変えさせた。0.8 にさげて聞くと「まだ速い」と言う。さらに下げて 0.72 に下げて聞くと「これがちょうどいい」と言って静かに聞き始め、5 分たつと iPad の画面を見ながら、自分から進んで音読をし出した。「無理しないでいいよ」と言う。「読みやすいねん。こうやって黄色で見えるから、ええねん。おれ、これ、好き」と答えた。また、さらに「おれ、最近、音読の宿題は全然やってへんねん。漢字が難しいし、読もうとしたら頭がごちゃごちゃしてきて、いらいらするし、しんどいねん」とも言った。

・すでに既習の単元教材を聞くと、速さは 1.23 とあげて聞いていた。何回も教室の一斉音読を聞いて内容が分かっていたり、暗唱していたりするためだった。しかし、まったく初出の単元教材では速さを 0.54 にまで落としていた。1 年生時にとった絵画語い発達検査 PVT-R では生活年齢 7 歳 0 ヶ月で 7 歳 9 カ月の語い年齢(SS12)もあるため、語いは豊富であると思っていたが、就学後、進んで本を読むことはないため、抽象的な語いが積み上がりにくいものと考えられた。

・毎回、少しずつではあるが、読み上げを続けていくことで、読みに対して抵抗が減っていった。保護者から「久しぶりに家で音読の宿題を少しだけだけど、やっているのを聞きました」という報告を校内通級の保護者面談で聞くことが出来た。

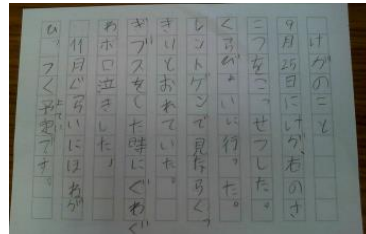
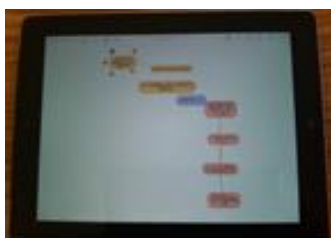


②を通じて

・家庭では、とめやはね等に気をつけて、字を丁寧に書くことが人として大切だと強く言われているので、プリントやノートに書くとき、時間がかかったり、字形に気を取られて、書き直しが多くなったりして、自信をなくしてしまっていた。保護者としては、A 児に「何事にも一生懸命取り組む人になって欲しい」という思いがあって、字形を整えたり、止めやはねに気をつけたりするように注意喚起をしていたということだった。だが、その保護者の思いをそのまま、A 児が受け止めるには、ギャップが大きすぎた。そこで、iPad で「漢字忍者」や「漢字二年生」を使うことで、画面に指で直接書くことができるようにしたところ、抵抗なくできるようになった。ノートやプリント等の紙に鉛筆で書いていたときは、はみ出しやずれが気になって、なかなか、はかどらず、集中が続かず、達成感を得られない、という悪循環に陥っていたが、それを避けることができた。ノートでは鉛筆を操作して書かため、時間がかかってしまうが、指を使って、画面上に書くと、あまり時間をかけずに書けるので、過剰な気負いがなくなり、スムーズになった。また、間違っても消去で跡形が残らないのも、自尊心が下がり、本児にとってよかったようだ。



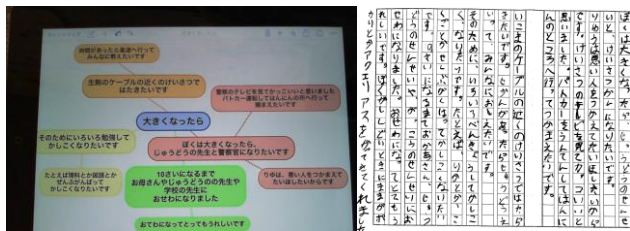
・URAWSS では視写速度は遅くないが、ストーリーを考えて、一文字一文字、文字を思い起こしながら字形に注意して書くので、200字程度の作文が2時間かかっていた。そこで、Simple Mind+を使い、書きやすくなることを経験して作文への抵抗を減らすことを試みた。一人ではまだ使えないが、対象児が話すことを指導者が入力していくと、200字程度の作文が20分で書きあげることができた。



・しかし、このスタイルでは、A児自らがスムーズなキーボード入力を行うことが現段階では無理なため、次善の策とは言い難かった。そこで、本児自らが Simple Mind+を使いこなす術はないかと探っていたところ、魔法のワンドグループ内で指摘を受け、iPad の Siri を使うことを思いついた。Simple Mind+を立ち上げておいて、Siri 機能を使って音声入力するのである。

・「A児がひとつ文章を考える→音声入力を行う→変換された文章を見ながら作文用紙に視写する」という作業を繰り返

すことで、作文を書上げていったのである。



・国語の読解テストに対して、抵抗感が強く、進んでしなかったり、白紙の状態があったりしたが、読み上げソフトや SimpleMind+等の支援ツールを学習に取り入れて行うことで「人と違うやり方で行ってもいいんだ」と気づき、読み上げてもらったりして、積極的に取り組むようになった。A 児はレゴブロックやプラモデル作りが大好きだが、作り方は直感的で説明書も見ずに、完成図を見て試行錯誤しながら作り上げていくという。それに対して筆者がプラモデルを作る場合には、説明書をすべて読んで説明書の手順通りに作っていく。指導の中で、たまたま A 児と話をしたときに、「先生とぼくは全然作り方がちがうやな」と驚いていた。

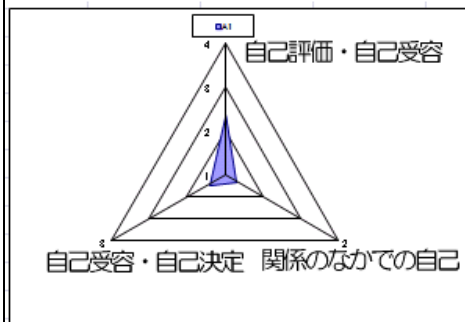
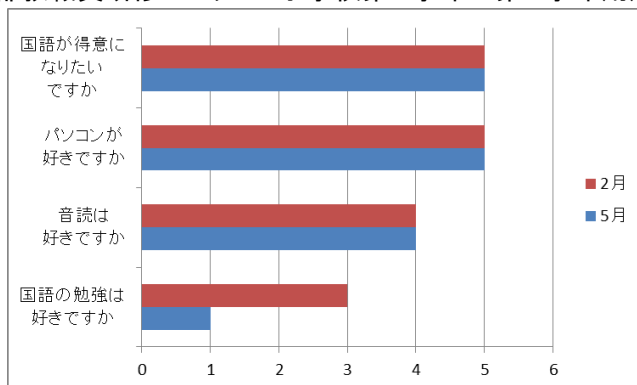


交流学級で国語のテストを受けたが、全く書けなかった。

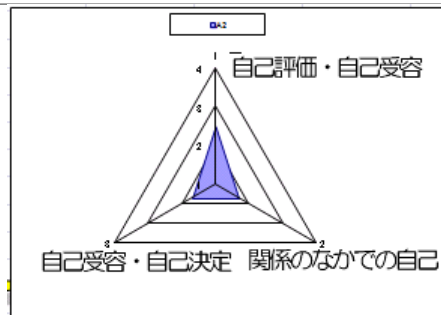
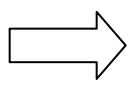


通級指導教室で再テストを読み上げで集中して行えた。

・A児の自尊心の変化についてであるが、自己評価シート(東京都教職員研修センター 小学校第1学年～第3学年用)で指導前の5月は、「自己評価・自己受容」が高く、「自己主張・自己決定」や「関係のなかでの自己」が低かったが、2月では、「自己主張・自己決定」や「関係のなかでの自己」が5月にくらべて高くなった。そして、国語に対するアンケートをとったところ、「国語の勉強は好きですか」という問いに対しては5月では5点満点で1点だったが、2月では3点になっていた。



5月



2月

・「ぼく、漢字分かるようになってきた」という感想を言うまでになったので、確かに自尊心を回復してきたように思う。しかしながら、実際に学期末の50問漢字復習テスト等では、客観的に点数が上がっているという結果は得られなかった。

・通級指導教室の時間では、楽しんでiPadが使う事が出来たものの、実際に家庭にiPadを持ち帰っても漢字アプリを一人では継続できなかった、という事実もある。合わせて課題としたい。

【報告者の気づきとエビデンス】

○報告者の主観的気づき

①に関して

・報告者がA児に「授業で困ったことはないか」と問うたときに、「国語や生活科のグループでの話し合いでだれがだれに何を言っているのかよく分からないときがあった」と答えていた。また、初めて Daisy を使ったときにA児が「速すぎてなんていっているか分からん」とつぶやいていた。

・報告者は、かねてより、聴覚音韻型の弱さは、読み書きの弱さに影響する、と考えてはいた。しかし、授業で先生の説明を聞いたり、グループ活動での話し合いに参加したりするときにまで、困っていたということにはA児の上記のような発言を聞くまでは、気付かなかった。そこには、以下のような背景があるから、と考えられる。学級では、先生の説明しているときに、不規則発言ではあるが、自分なりの感想を言ってみたり、グループでの話し合いのときにも、テーマとは少しずれているが、意見を出したりしていた。

・A 児のように、ADHD という教育的判断だけで、医療診断はない児童も多いと考えられる。その場合、「医療モデルとしての ADHD」の状態像から注意集中の短さを考えていくのではなくて、実際の困り感である、音の選択性や弁別能力などの聴覚的認知能力の弱さという「聴覚音韻の弱さ」が、集中力の短さを引き起こしている、という視点から考えてもいいのではないかと、思う。そして、A児のように注意集中の弱さをと読み書きの弱さを併せ持つ児童が、時として「学習性無力感」のような状態像を示すことがあったり、二次的な障害として「不登校」状態を呈したりするのは、じつは、上記のような「聴覚音韻の弱さ」の困り感が累積した結果である、ということが言えるのではないかと。

・しかしながら、この報告者の気づきに対しては、A 児が持つ困り感の多くは、読み書きと注意集中の弱さを持つ児童の ADHD 由来の困難として考えた場合に一般的ではないか、という反論も、じゅうぶん根拠があるといえる。

・そこで、注意集中の弱さを支援するために、考えられる手立ては、以下の通りである。

▼指示を出す前に「Aくん」と注意喚起をする。

▼指示のあとに内容を復唱させる。

▼ことばでの指示と視覚支援を合わせる。

▼「読む」、「書く」、「考える」、「発表する」等のステップを分けて授業を構成する。

・それでは、A 児の背景をより深く読み解くためには、どんな手立てがあったらだろうか。ひとつには ITPA 言語学習能力診断検査での「聴覚－音声回路」の落ち込み方を分析することも挙げられる。あるいは、音韻認識検査の混成課題、抽出課題、分解課題、削除課題などを実施することも考えられた。

・今回の事例では、明快に背景を読み解くことはできなかったが、読み書きの弱さと注意集中の困難さを有する児童の背景を読み解く際に、ADHD の特性が根底にあると考えて、注意集中の問題から「読み書き困難」が生じるというとらえ方と、聴覚音韻の弱さが根底にあると考えて、音の選択性や弁別能力などの「聴覚的認知能力の弱さ」が、集中力の問題を引き起こすというとらえ方の二つの方向性が考えられることを問題提起したい。

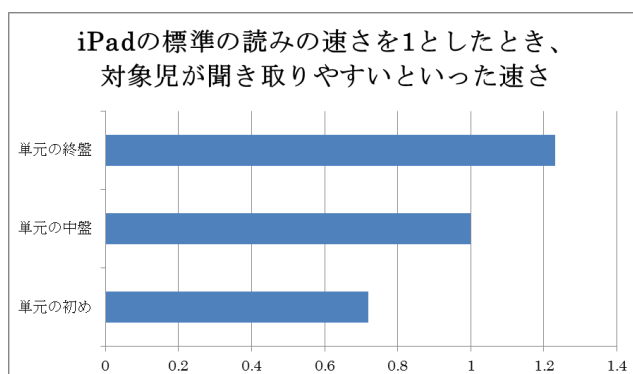
②に関して

・A児になぜ、作文が書きにくいのかと聞いたとき、「作文を書くとき、文を思いついて書こうとしたら、漢字とかひらがなが思い出せないから、考えているうちに頭の中がごちゃごちゃになってしまっしんどくなくなる」ということだった。このように、「文章を考える」と「文字を思い出す」ことの二重課題による負担が明らかな場合には、これを減らす手立てが必要なのではないか。

○主観的気づきに関するエビデンス

①に関して

・単元のはじめは、読み上げソフトを使っても、言葉の理解



もあいまいで、内容が分からないので、速度を 0.72 に下げて聞いていた。単元の中盤になると、内容が把握できてきたので、標準速度 1.0 でも聴き取れるようになっていた。単元の終盤では、完全に内容も理解できているので、速さを 1.23 にあげて聞いていた。

・読み上げ速度が、なぜ、聞く速さが早くなっていったのだろうか。対象児に1秒間で「うさぎ」と言って聴写させると、「んさぎ」と書いてしまうが、3秒間で「う・さ・ぎ」と言って聴写させると「うさぎ」と書くことから、聴覚弁別の弱さがあると思われる。しかし、読み上げソフトを使って何回か聞くうちに、知的には平均域に位置するので、内容理解が進んで、聴覚弁別の弱さが補償されていくのではないかと推測した。

②に関して

・Simple Mind+で音声入力を使うとき、「A児がひとつ文章を考える→音声入力を行う→変換された文章を見ながら作文用紙に視写する」というプロセスを経るのだが、当然ながら、変換された文章には、A児が読めないであろう漢字を使った文章や誤変換されて一見、読みづらそうな漢字が散見するのだが、A児はあまり悩むことなく、書き進めていった。

・漢字の読み書きには苦手さをもっているのだが、なぜ、作文を書き進めることができたのか。それはA児自らが文章を考えて音声入力をしているため、自分が言った文章をおそらく「音」として覚えていたためである。それが、1文という短い単位であったため、保持できたのではないかと推察できた。



○その他のエピソード(今後の支援に向けて)

①に関して

・A児の聴覚音韻の弱さや不注意に対して、3つの支援を提示したい。

・ひとつめは、iPadでVoice of Daisyを使うことで、引き続き、A児に対して、内容理解を深め、読みに対する負担を軽減する支援としたい。

・ふたつめは、交流学級で、担任やA児に関わる教師が、説明したり、指示を出したりする際に、早口にならないよう、スピードに気をつけることと、図や簡単な指示文等で視覚提示することを心がけてもらうことを引き続き、継続していく。そのための具体的な手立てとして、個別の指導計画や個別の教育支援計画にその旨を明記してもらうこととする。

・これから学年が上がるにつれて、班やグループでの話し合い活動やディベート形式での活動も増えるものと思われる。手立てとしては、例えば、A児のいるグループだけではなく、各グループにミニホワイトボードを用意し、話し合いの際に、出ているキーワードを書いたり、目印(例:マイク、ボール、ミニコーン等)をもっている参加者のみ発言できるというルールをつくったり、発言の前には必ず自分の名前を名乗るというルールを徹底したりすることで、次は、だれが話すのか、今、誰が話しているのかが視覚的にわかるようにしたい。また、そうすることで、議論が白熱したときに、同時多発に発言が起こるという事態も避けることができると思われる。



・三つ目は、教室内での座席を前から2列目にする、集団指示を出す前に「Aくん」と注意喚起をする、集団指示のあとに個別の指示を付け加える等の支援を出来る限り行うよう留意してもらおう。

②に関して

・A 児に対して、漢字を書く際に「止め」や「はね」への意識が過剰な負担にならないよ、引き続き、保護者の理解を得ることができるよう、連携を深めていきたい。

・家庭とも連携して、iPad やタブレット端末で、漢字の書き取りアプリを使用して、書き取りへの抵抗を減らす。

・iPad が使える状況ならば、「Simple Mind(+Siri)」で作文を書く。使えなければ、ポストイット等で代用する。